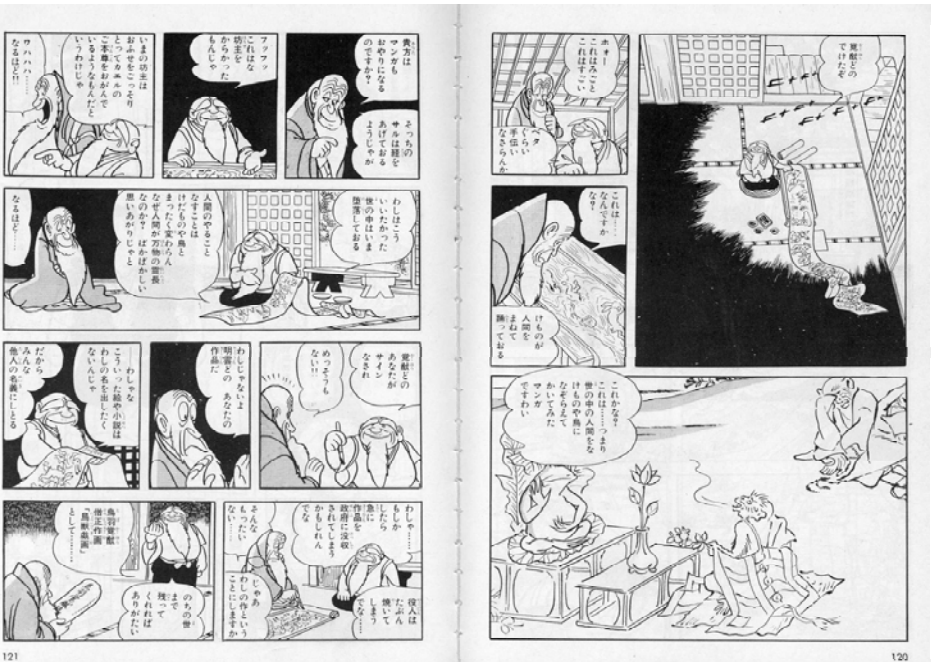


## 14の講義内容 「一枚の絵」を書いてみよう

いままで、私たちは日本の文字を用いて文章を作成してきましたが、ここで絵を描くことで文章をより理解する取り組みを図ってみようと思います。

### 「思い絵書いてご覧」、創造の世界とは

絵を「かく」という時には、図や絵にして表現することから「描く」という漢字を普通は用います。これを「絵書く」と云うことはさらに一歩文章の方へと近づけると云うことに他なりません。実態のある風景画や人物画などは異なり、私たちの頭のなかで思い描いた像を紙の上に直接模写してみることを考えているのです。このような手法は、今に始まったわけではありません。古くは、平安時代の末頃に「絵巻物」が数多創り出されてきました。皆さんがご存知のものとしては、京都高山寺で鳥羽僧正が描いたとされる国宝『鳥獣戯画』が今日最も知られております。現在、この『鳥獣戯画』の原本は、上記のような複製画像も作られ、誰もが直接手にして見ることができるようになってきています。で



は、『鳥獣戯画』の最たる部分を実際に見ておきましょう。上の図は、蛙と兎とが相撲でもとったのでしよう。一羽の兎が横転し、これを倒したと思われる蛙が口から息を吹き出しています。「どうだ、これが俺の心技体だ！」と云わんばかりの姿勢が見え、その後ろには三疋の観戦していた蛙たちが笑い戯けているような姿で書かれています。ですが、この絵巻物には詞書きは一切ありません。この断片がどのような物語を作り上げていたのかは定かではないのです。この蛙と兎の組み合わせもさることながら、他には猿も袈裟を着たり、帽子を被ったりして描かれます。これを現代の人々がどのように受け止めているのかをまず紹介しましょう。この図絵を見てその制作の意図を漫画家手塚治虫は、どのように表現したかといえば、『火の鳥』「乱世編」のなかで、「人間という存在」すなわち「わしはこういいたかった。世の中はいま墮落しておる。人間のやることなすことは、けものや鳥とまったく変わらない。なぜ人間が万物の霊長なのか？ばかばかしい思いあがりじゃと。」と作中の描き手である天台座主明雲に語らせる。このような世を諷刺した作品は、



時の政府に没収され、焼き捨てられると危惧した明雲は、知友である鳥羽覚猷に作者の署名を頼む。その理由が上記のセリフとなつて表現されています。この時代、平清盛が宮中に入内させた娘である徳子が第一の皇子を生み、やがて幼帝安德天皇を擁立し、政権を我が物とした時代にあたります。明雲は権力争いに明け暮れるこれらの人の群れを煩惱そのものとし、人類がこの地球上で最も優れた生き物であるなど己惚れてはならないことをこの絵巻物に描ききつていと見たのです。

この戯画の活写は、受け止める人の立場が変われば、ただのパロディーの原点にしか過ぎません。実際、世の中には、こうして描かれたりしています。上図は、大阪のとある蕎麦屋さんの店のなかに数枚描かれたもので、ここには蕎麦を運ぶ蛙が描かれており、どういう訣でしょうか…、一匹の蛙の頭のうえでその積み上げられた蕎麦の容器がひっくりかかってしまつています。傍には一匹の犬が身構えるように立ちはだかる蛙に対して唸り声をあげんばかりの姿勢を取ろうとしています。

約九〇〇年と云う悠久なる時間と空間とを超越してもの見事なまでに現代の私たちの生活のなかに浸透している絵だと思えます。此外、皆さんもお気づきの『鳥獣戯画』の使われ方を実際にご紹介いただけたらありがたいのですが、如何なものか。

しょうか。

### この世のできごとと人

人は実に身勝手な生き物かも知れませんが、文明の叡智という力を以て自然と対峙しようとすることが俟見受けられます。例えば、ある山深き里に立派な舗装道路が通つて、今まで車が通れなかったところに車が走るようになった、この山奥にひっそり暮らしていた人たちは大いに喜び、何をしたか？皆さんはもう既にお気づきかも知れませんが、そう、家財道具凡てをトラックに積み込んで別な交通の便利な土地に引越してしまつた。この道はそのために整備されたというのか…、本当に吹き出した面持ちにもなるでしょう。まるで、マンガそのものです。川に橋を架けたり、山の麓に穴を掘つてトンネルを作つたり、人が行けそうもないところにケーブルカーを通したり、私たち人類は自然から遠のき続けています。しかし、一端、人がその土地を離れたらすれば、そこは自然が元の原生林に戻していきます。

私たちの身体もこれによく似ているのです。例えば、身体機能を停止すれば、すべてが動かなくなります。手でも足でも口でも耳でも鼻でも使わないでいたら、何も出来なくなつてしまうのです。脳もそうでしょう。記憶する、再現するという日々営まれて一連の動作を止めてしまふとある種の言語障害を発生することに繋がっていきます。日本人で漢字もかなの文字も両方読み書きできていた人が或日漢字が読めない人、かなが読めない人になる失読症候群。ものが書けない失書症候群となつてしまうことになるのです。ですから、いつもいつも弛まぬ努力と訓練を日常茶飯事なものとして位

置づけておくことが大切なのでしょう。そうです。書くこと、読むことを止めないことです。私たちは日本人は漢字とかなそれにローマ字までも使い分ける脳の力を有しているのです。この脳が占める世界はやっているとやっていないのでは大違いなのです。朝晩新聞や雑誌を読む、また、この事柄を書き綴ること、何もしていないように実は奥が深いのです。

そこで、ひとつの実験を試みましょう。「輪」というものを描くのです。みなさんはどのように描きだしますか。私は曾て、こんな一文を書きました。

### 「輪(わ)」文字

「輪」文字である「まる【○】」は日本と韓国とで書き方が異なることを昨年暮れ私は韓国の知人「ワ」である。これは従来「和」の省體「口」から來たと信ぜられてゐる、その「口」をわの假名として用ゐたのも事實だが、橋本進吉氏は、平安朝の古寫本に往々「輪」の字を「○」とかいてゐるものに基づいて、それが「○」の如き形となり、さうしてこの形が出來たといふ説を立てられたが、これは漢字から假名が脱化したといふ考とは相容れないやうであるけれど、事實さういふ事もあるのだから之を是認せねばならぬ。即ちこれは本邦人按出の「○」(輪)といふ義字から生じた特別の異例といふべきである。

の古いカタカナ文字「ワ」の表記法に合致していることで共通するから面白い。「ワ」については、山田孝雄著『國語史』「文字篇」第九卷〔昭和十二年、刀江書院刊〕の「假名の確立」〔253頁〕にて、「これ(「ワ」)は従来「和」の省體「口」から來たと信ぜられてゐる、その「口」をわの假名として用

人と話しをしているなかで知る機会を得た。日本人の書き方は下中央から時計回りに描くのが普通であるのに対し、韓国では上中央から陸上のトラック回りに書き出し、さらに右上から今度は時計回りにして一つの円形を描くのである。これは、日本

ゐたのも事實だが、橋本進吉氏は、平安朝の古寫本に往々「輪」の字を「○」とかいてゐるものに基づいて、それが「ワ」の如き形となり、さうしてこの形が出來たといふ説を立てられたが、これは漢字から假名が脱化したといふ考とは相容れないやうであるけれど、事實さういふ事もあるのだから之を是認せねばならぬ。即ちこれは本邦人按出の「ワ」(輪)といふ義字から生じた特別の異例といふべきである」と述べておられるが、韓国人の古い表記運筆方法と相通じていることがいつ頃からなのか明確ではないが、その共通性を視野に入れておく必要があるのではないかと思うのである。

さて、本題に戻し、絵を書くことで、文章が実際に書けるようになるのかということである。結論を先出しすれば、絵を描き、その絵を見ることで、人は文字という言葉を使うか、音声という言葉を使うかは別にして、これを対象として捉えようと思つてみます。

逆に、絵のない文章に絵を添えていく。これも面白い試みであります。一度でしたが、夏目漱石『坊っちゃん』を絵巻にした本を古書店で立ち読みをしたことがありました。小説のストーリーが既に頭のなかにインプットされていますから、どの場面をどう描き出したのか実に興味を懐いた訣です。ともかくにも、絵と文章が融合することで、実にその作品そのものが大きくみえてくるから不思議です。今日はその取り組みをしていこうと思つてのです。

《課題1》左図を見て、「嫁」と「姑」、この二人の人物の心の内を探ってみましょう。文章にしていくことで此の図絵から何を見極めるかということになります。そして、題名は「心とハート」とします。



(嘘實の出るか嘘)

《課題2》次の文章は、江戸時代に出版された『本朝知恵鑑』の一節です。この文章を絵に仕立ててみましょう。

力のある所、人によりて皆かはれりどかや  
むかし高野山の僧は、耳の垂珠に力ありて  
肥たる人にとりつかせて、何町も引すり行  
くこと、さらに苦もなく、後は両の耳に二  
人とりつかけるに、やすくと振あるさけ  
るとなり、那智山の僧は、尻に力ありて、  
火吹竹をはさみ破りぬ、あるとき櫂の棒を  
はさみけるを、四五人にて引とりぬれども  
つゝに尻に引まけたり、指に力ある者は、  
枕引に強く、足に力ある者は臍をしに強し  
皆これ得ぬ所、得たる所ある違ひ斯くの如  
し、人の智慧も大かた是に同じき事あり

力のある所、人によりて皆かはれりどかや。むかし高野山の僧は、耳の垂珠に力ありて肥たる人にとりつかせて、何町も引すり行くこと、さらに苦もなく、後は両の耳に二人とりつかけるに、やすくと振りあるきけるとなり。那智山の僧は、尻に力ありて、火吹竹をはさみ破りぬ。あるとき櫂の棒をはさみけるを、四五人にて引とりぬれども、つゝに尻に引きまけたり。指に力ある者は、枕引きに強く、足に力ある者は臍をしに強し。皆こえ得ぬ所、得たる所ある違ひ斯くの如し。人の智慧も大かた是に同じき事あり。

《コラム》

漫画家の石ノ森章太郎さんが漫画日本の歴史をお書きになったとき、「覚書き」という手書きの図絵資料を作成していました。この内容が実地踏査をもふまえていて緻密で実に美事なものであり、その適応性に驚かされます。

石ノ森正太郎作品年表Ⅱ [http://www22.ocn.ne.jp/~strinx/ISFC/database/shotaro\\_c.pdf](http://www22.ocn.ne.jp/~strinx/ISFC/database/shotaro_c.pdf)